瀬戸内国際芸術祭
×
香川大学
小豆島
夢プロジェクトチーム

300年以上伝わる農村歌舞伎舞台で演劇を上演。

夏会期（8月24・25日）トラと呼ばれたサル（中山農村歌舞伎舞台）

秋会期（9月28・29日）蛙の池の今昔物語（肥土山農村歌舞伎舞台）

このワークショップでは参加者の経験は不問。黒板には「キャラ変自由」など、演劇の楽しさを伝える言葉が書かれていました。「小豆島の未来を考える演劇、みんなで作り上げていくのが面白い」という、柴田講師からのメッセージ。

初夏の小豆島、「香川大学×小豆島 夢プロジェクト」のオーディション会場を訪ねました。最初はぎこちなかった参加者も、3時間経つ頃にはセリフを自分の言葉のように話し、登場人物を生きていました。最後の感想では「架空の人物を演じていたのに、本当にその人がいるようで、その人の悲しみまで伝わってきた」「自分がこんなこともできるんだということに驚いた」、「気持ちよかったですねぇ！」と快心の笑顔も飛び出し、参加者自身が変化していく姿は感動的ですらありました。

瀬戸内国際芸術祭２０１９では、創造工学部の柴田悠基研究室が演出家の豊永純子氏を迎え、小豆島の中で小豆島を考える演劇を制作しています。制作統括の柴田講師と、脚本・演出を担当する豊永氏に、お話を伺いました。

―オーディションはどうでしたか？

豊永　純粋に楽しい時間を過ごしました。皆さんすでにチーム感があったのが不思議です。この方たちと一緒に舞台を作っていくのだと楽しみになりました。

柴田　2日間で22名の応募がありました。小豆島や高松の方で、ほとんどが演技未経験者。皆さんそれぞれ目標や達成したい思いがあり、だからこの場でも作品を創るという雰囲気が出ていたのだと思います。

豊永　「こんなことを言ってもいいのかな」とためらわずに、ここでは素直に思ったことを口に出してくれました。自分の気持ちを相手に伝えながら、演劇に関わっていただけたら。嬉しいオーディションでした。

―どんな作品になるのでしょうか？

豊永　夏会期では小豆島の高校3年生が主人公です。自分の人生を考える高3、でも学校や家庭は問題だらけ。島の中で生きるのか、外に出るのか。主人公が島で今まで出会わずにいた人に出会い、自分や人、育った環境を一度深く考え、自分の将来を決めていく姿を描きます。

柴田　5月から小豆島中央高校の廊下の一角に「小豆島プロジェクト研究所　島のへそ」、通称「へそ研」を開き、月木金曜日は豊永さんが1日中、高校生のリアルを感じながら脚本を書いているんですよ。

KAGAWA UNIVERSITY × SHODOSHIMA DREAM PROJECT

小豆島池田町中山地区、中山農村歌舞伎舞台の目の前に広がる千枚田。この地区には約800枚の棚田があると言われ、いまに残る日本の原風景として、四季折々の美しい表情を見せます。島の自然を感じながら鑑賞できるのも今回の舞台の魅力です。

瀬戸内国際芸術祭２０１９　香川大学出展作品

02

太田 泰友・岡 薫 × 香川大学 国際希少糖研究教育機構

瀬戸内国際芸術祭の夏・秋の両会期、希少糖が芸術作品として展示されます。
タイトルは「Izumoring－cosmos of rare sugar」。
ブックアーティストの太田泰友さんと、岡薫さんとの共同制作。
香川大学国際希少糖研究教育機構の何森健研究顧問が希少糖の監修を行います。

研究、産業、文化、そしていま 芸術としての希少糖へ

瀬戸内国際芸術祭でアートとサイエンスが「希少糖」を中心に融合します。希少糖研究を進めてきた何森研究顧問は「２０１８年出版の広辞苑に『希少糖』や希少糖のひとつ『プシコース』が掲載された時、希少糖が〝ことば〟という文化として認識されたことを大変嬉しく思いました。今回芸術作品に取り上げられることで、希少糖をアートとして表現できることは非常に楽しみです」。会場には希少糖を模した白い山が。その中には本が埋まっており、個々の希少糖を表します。研究が進むＤプシコースの本は詳細に書かれていますが、今後の研究が待たれる希少糖は白紙の本で表現。すべての配置は何森研究顧問が発見した「イズモリング」に基づきます。

「希少糖研究を通じて、サイエンスは産業化による社会貢献だけでなく、人の生きがいを作り出せることや、文化との関係もあることを教えられました。希少糖が多様な側面を持っていることを大切にしたいと思います。ぜひみなさんも会場に足を運んで、楽しんでください」と話す何森研究顧問です。

SCHEDULE

●夏会期 2019年7月19日～8月25日
●秋会期 2019年9月28日～11月4日
協力：Opsodis Ltd.　場所／北浜alley（高松市）

https://setouchi-artfest.jp/artworks-artists/artists/352.html

何森 健

香川大学国際希少糖研究教育機構研究顧問
岡山県玉野市出身。香川大学農学部で糖の研究に従事し、世界で初めて希少糖「D-プシコース」の生産に成功。プシコースはこの4月、米国食品医薬品局が、肥満につながる「糖類」から除外することを決定し、さらなる需要の拡大が見込まれている。

柴田 悠基（右）

創造工学部講師。現代美術作家。「情報社会が社会に与える影響」をテーマに幅広い手法で芸術表現を行う。主な展覧会に「IN PROGRESS」Zendai Contemporary Art Space（上海ヒマラヤ美術館 別館）中国上海市（2015）など。専門分野は現代美術、メディアアート

豊永 純子（左）

演劇の作・演出家。劇団じゅんこちゃん主宰。2016年より東京藝術大学で非常勤講師を務める。2017年は青少年支援員として勤務する傍ら、日本遺産PR事業『ニッポンたからものプロジェクト』の構成・進行台本を担当。現在は香川大学 地域連携コーディネータとして小豆島に住みながら『演劇でみる小豆島のカタチ』の作・演出を行う。

豊永　高校生はとても協力的で、写真部は演劇ができる過程を撮影してくれたり、オリジナルで詞と曲を作ってくれる人もいたり。悩んでいたら、島の言葉でセリフを読んでくれたり。脚本を書いたら「明日みんなに見てもらおう」「どうしよう、つまんなかったら」なんてドキドキしながら学校に行きます。こんなふうに作る戯曲ってないです。

柴田　「へそ研」は小豆島の高校生たちに香川大学のことを知ってもらう意図もあります。高校生が聞きたいことがあれば創造工学部の先生たちに来てもらうことも考えています。

―秋会期はどんな作品に？

豊永　肥土山で歌舞伎が始まった３００年前を描きます。庄屋の太田典徳氏が私財をなげうち様々な困難をのりこえて蛙子池を作ったのが始まりなのですが、島の高校生でも知らない人が多いんですね。３００年前の人がどんなふうに未来の小豆島を思い描いていたのか、歴史を遡り人の思いを知ることで、自分たちは何を残せるのかを考えたいと思います。

柴田　アートじゃないとできないことがあると感じています。芸術は自分自身を見つける装置。「香川や瀬戸内国際芸術祭に対してこんな思いを持っていて、こうしたい」と自分や社会の問題を発見することができる。それは結果ではなく「過程」、演劇ならではの力だと思います。

豊永　演劇では、出演者はみんな自分ではない役を与えられます。「どうしてこのタイミングでこのセリフを言ったのだろう」と深く考え他者への想像力が豊かになるんです。稽古ではそんな過程を通して、心をパカーンと開いていけると思います。

―どんなところを見てほしいですか？

柴田　メンバーが一生懸命、未来や自分のことを考えて作品を作っていきますので、それを見てほしい。見ることが「画竜点睛」。見るあなたも作品の一部だとお伝えしたいです。

豊永　いろんな楽しみ方ができる作品です。小豆島のことを知りたい人、農村歌舞伎の舞台を見てみたい人、瀬戸内国際芸術祭ファンも、知り合いが出演するという方も、みなさん心に響くものがあります。見た後は、ぜひ感想を伝えてください。伝えられた人がさらに何か行動を起こす、いろんな作用がつながっていく作品だと思います。

SCHEDULE

●夏会期「トラと呼ばれたサル」
2019年8月24日（土）、25日（日）17：00～18：00
中山農村歌舞伎舞台

小豆島で生まれ育った若者は、自分の未来をどのように考え、選択するのか。島のリアルと高校生の展望が詰まった現代劇。

●秋会期「蛙の池の今昔物語」
2019年9月28日（土）、29日（日）17：30～18：45
肥土山農村歌舞伎舞台

深刻な水不足を解消するため立ち上がった300年前の英雄が、現代にタイムスリップ?!怪事件の裏に隠されたメッセージとは・・。

https://setouchi-artfest.jp/artworks-artists/artists/267.html

オーディションはワークショップ形式で行われました。劇のワンシーンを演じる参加者たち。登場人物の心理を演出家が説明します。それを参加者それぞれが自分の中で咀嚼し、演技がどんどん変わっていきます。